

園長として「どんな園にしたいか？」という問いに対して、私は「一人ひとりに居場所がある」「あたたかみのある居心地が良い園」など、色々あるのですが、一番大切にしたいことは、「自分らしく過ごせる（生きる）」それが園における様々な関係性（子ども同士、子どもと保育者、保育者同士、園と保護者、保護者同士、園と地域、実習生やボランティア、その他様々な団体や関係者）において、つながったり、時にはぶつかったり、協力したり協働したり、分担したり、対話したり、、、  
「お互いを認め合える」（好きではないけど認める、納得はできないけど相手を尊重する、価値観は違うけど協力はする）というような「社会の縮図」を創りたいと考えています。

その上で、最も基本的なマインドとしてあるのが、子ども（人）の人権に関わるテーマです。種の会のマネジメントブック「糧」（管理職のための理念ブック）には、こんなふうに書かれています。

### 子どもを侮らないことが園風土を浄化する（マネジメントブック糧より）

子どもは全てそのらしさを持っています。そのらしさはその子の弱点＝課題として見えることもあります。弱点を克服してほしいことが保育者の願いになったりします。

給食時、「種ちゃんは今日もしゃべってばかり・・・！」と担任の内なる声がつぶやきます。その思いは事務室でその子への願いではなく不満として「種ちゃん、今日もすごく時間がかかってたいへん」と他の職員との談笑でついつい口から漏れることがあります。そのやりとりを耳にした別の保育者も「お兄ちゃんももっとたいへんだったのよ」とついつい便乗してしまうことがあります。何気ない会話ですが、会話が弾むほど子どもを侮ってしまっているのです。

こうなると人権侵害の加害者です。園全体の受容の心、寛容の精神を壊し、子ども主体の保育を阻む要因になると管理職は認識してください。この課題は職員に対する愚痴の口外と同様に、誰もが悪気もなく平気で口にする事なので、困難なテーマです。

子どもが人として本来持っている素晴らしさに立ち還って見ましょう。例えば、劇のお稽古で、子どもは台本がなくてもいち早く覚えて演じることができます。大人は自分の書いた台本をいつまでも手放せません。乳幼児の記憶力は高く洞察力は深いのです。そこに意識を傾けると、その子“らしさ”が見えてきて、侮るような言葉は出せなくなるはずで。

ご両親や祖父母に祝福されてこの世に生まれてきた唯一無二のかけがえのない存在であるその子の未熟な仕草や偏った行動を談笑の中で侮るのは、保育者としてはもちろん、人としても情けない態度です。あなたも自分が生まれたとき、どれだけたくさんの人が歓喜に包まれたのかを思い起こしてください。

保育の中で、子どもの素晴らしさが実感できるような“仕掛け”をほどこすことも大切です。多くのことを子ども同士の話し合いで決めていく保育を膨らませ「プロジェクト型の保育」などを画し「キラキラシート（職員集団で子どものいいところ探しの記録）」などの振り返りツールを管理職が積極的に活用するなどして、子ども本来の良い面に目を向ける仕掛けと仕組みで、解消に努めてください。

以上

これは、対子どもだけでなく、保護者、同僚、地域の方、お客様、実習生、ボランティアなど、私たちと関わる人全ての人に対して、常に心がけるべき内容（マインド）です。法人では、このテーマを取り上げてミドルリーダー年代の職員を対象にオンライン研修を実施しています。園内においても、このテーマに沿った社訓のような文言を毎朝、朝礼で唱和しています。

それだけ、このテーマは一筋縄ではいかず、わかっちゃいるけど、、、なかなか難しいのです。だからこそ、仕掛けや仕組みが必要なのと、管理職が子ども（人）の人権を守るために「言うべきことを言う！」という覚悟や意志が最重要課題なると認識しています。頑張らなければ、、、！